

0 1 . トキワ荘のペットなカノ女

【華乃】

「ハミダシクリエイティブ」

【華乃】

「でー、アメリカが泳ぎにいききたいって言うのよ。いやいや、プール」

【華乃】

「や、もちろんプライベートなところ。他だれもいないかんじの。そう、アメリカが会員なんだって。あたっ」

【華乃】

「だから、来たいならあんたも来ていいって。来る？ たぶんあの子、写真撮りたがるけど」

【華乃】

「だよね、まあそう言うと思ってた。あはは。あてっ」

【華乃】

「いや私だってやだよ！ ああいや、普通に写真撮るのはいいけど、インちゅたに載せるのはやダって意味で」

【華乃】

「でも今回、始まりが私でさー。あてっ。ちょ、ちよっと待って。痛い痛い。や『アメリカ、相変わらず細っそいね』って話しててさー」

【華乃】

「『泳ぐのめっちゃいいよ』って言うから、あーまあ、そうなんだろうねーってかんじで返事して……あたっ、あたっ」

【華乃】

「や、私もね？ 正直言うけど、ここのところ勉強ばっかりしてたし……あ、あと……あとね？ なんていうの、幸せ太り？」

【華乃】

「恋人できて気が抜けるってよく聞く話だし……や、数字の上では変わってないよ？ いやほんと。ていうか攻撃痛い。痛い、待って」

【華乃】

「あんたの前でかわいくいたい気持ちは変わってないし……ただその、必要に迫られてとはモチベが違うっていうか……」

【華乃】

「だって、あんたが私のこと毎日誉めて自己肯定感高めてくれるから、満足しちゃってるところあつて……しょ、正直に言うけど、おなかのぷに肉には心当たりがあつて……」

【華乃】

「は？ 私のおなか、エロいから好き？ ま、またあんたがそうやって誉めるから、私も甘えちゃつて……！」

【華乃】

「と、とにかく、私的に努力したい気持ちはあつて、でも一人だと怠けるから、アメリカにいつしよしてもらえるのはありがたいわけよ」

【華乃】

「あつ、だから攻撃しないで……あつ攻撃すんな！ やめろ！」

【華乃】

「あつ無理！ 無理無理無理やめて！ あつああつあつ、あああああああ！ やめつ、あつ、やめえええええええ！」

【華乃】

「ああああもう！ ああっあっ、あ、こら、ガードすんな！ しないで！ だからガードするなって……あっ攻撃しないで！ ごめんなさい！ 攻撃しないでください！ 私が悪かったです！」

【華乃】

「やめて！ あっ無理なんだけどあっ、やめっ、あっ、ああああああ！ 無理いいいいいいい！」

【華乃】

「あっああああ……ああ……」

【華乃】

「無理なんだけど」

【華乃】

「ま、いいや。ゲームは一旦やめよう。話の途中だったしね？」

【華乃】

「は？ いや悔しくないけど。は？ ぜんぜん悔しくなんかないけど。10戦やってれば誰だって1戦くらい負けることだってあるでしょ。だからぜんぜん悔しくなんかないんだけど」

【華乃】

「うるちやい」

【華乃】

「（頬にキス）」

【華乃】

「今はキスだけで我慢したけど、それ以上言ったら耳舐めるからね。そーれーよーりーも！ プールあと水着！」

【華乃】「いや行くよ。行くには行くけど……あんた知ってるでしょ。私が泳げないの」

【華乃】「まあ、そう。泳ぐわけじゃないし、アメリカに泳げないことは伝えてあるけど、んー……なんだろうな」

【華乃】「別に行きたくないとか恥ずかしいとかって話じゃなくて、これ話したときのアンの反応が見たかったわけ」

【華乃】「どうして、って……あんただけだったでしょ、私が泳げないの知ってるの」

【華乃】「そう、特訓とかしたし……あんたの家のお風呂場で」

【華乃】「あはは。ね。けっこうすごいことしてたよね。まだ付きあう前だったのに。男の子と二人でお風呂呂って」

【華乃】「緊張した？ 私もけっこう緊張してたよ。は？ そう見えなかった？ あ、よかった」

【華乃】「なんかちよつとエロいこと意識したの気づかれてないか心配だったからね、当時の私」

【華乃】「は！？ やつ、別にエロいことするつもりじゃ……！ い、いくらなんでも、そこまでは考えてない！ あの時点では！」

【華乃】

「ただやっぱ、男の子の家で、二人きりでお風呂入ってるわけだし？ 他に目的があるとはいえ、ドキドキはしたよね、それは。え、あんたも？」

【華乃】

「えっその話詳しく聞きたい、聞かせて！」

【華乃】

「興味あるに決まってるでしょ、私を意識したなんて話。思いだせる範囲でいいから、当時の気持ちを正直に言いなさい」

【華乃】

「言ってくれないと耳舐めちゃう。れろっ」

【華乃】

「あはは、くすぐったかった？ でもこのくらいしか、あんたに告白を強要させる方法ないしなあ……」

【華乃】

「私？ だから私も意識したって……や、最初からじゃないよ、ちゃんと真面目な目的があったし。私からお願いしたわけだし」

【華乃】

「ただ、私が『けっこう恥ずかしいことしてるね』って言うてから……いま思いたすと、あんなこと思っても言わなきゃいいのってかんじだけど、当時の私」

【華乃】

「じゃあ、思い出話でもしよっか。付きあう前のあなたの気持ちとか、めっちゃ興味あるしね」

【華乃】

「ちよっと待っててね、いまコーヒーいれてくる。砂糖は……いららないかな」

02. 待って水着で男子と二人きりとか無理なんだけど

【華乃】「あのさ。今さらだけど、けっこう恥ずかしいことしてるよね、私たち」

【華乃】「ていうか、今ひよりんが帰ってきたら、いろいろ終わるね」

【華乃】「うそお。飛びこむスペースくない？」

【華乃】「まあでも、仕事で出かけてるなら、予定よりも早く帰ってくるってことはなさそうだし……」

【華乃】「せ、せっかく自分の意思で顔を浸けられるところまできたから、あと少しだけ付きあってくれる？」

【華乃】「やつ、水に慣れる以外の目的なんてないけどね！？ ベベっべっ別に、あんたはそこに座ってくれてるだけでいいのわよ！」

【華乃】「私が怖気づいて、いつまでも水面ガン見し続けてたときは、さっきみたいに上から顔押さえつけてくれる？」

【華乃】「や、うん……ヤバかったらすぐタップする。あんたが思いきりやってくれたお陰で、壁突破できたところあるし、絶対怒らないし、あとから文句言わない。約束する」

【華乃】「ん？ 湯船から出て？ あんただけ？」

【華乃】

「まあ、そのほうが押さえやすいかもしれないけど……私が潜るスペースも広くなるし……」

【華乃】

「でもなんか、外から私の頭を水の中へ押しつけてるのって、絵面ヤバくない？ や、外からじゃなくてもヤバイ絵面だし、誰が見てるわけでもないんだけどさ」

【華乃】

「あと、怖くなったとき、目の前にしがみつけるものが……人がいると、気持ち的に助かる」

【華乃】

「うん。ありがと、わがまま聞いてくれて。心強いよ」

【華乃】

「じゃあ、いくねー……すー……はー……」

【華乃】

「……今度はできるだけ長く潜らなきゃ」

【華乃】

「ぐぶツツツ……!」

【華乃】

「あんだいまのばおがじいぢやないのわよ!」

【華乃】

「あと少しで顔浸けるところだったでしょ! は? 時間かかりすぎ?」

【華乃】

「そっ、そうれっ、はッ……覚悟してたというか、準備をしたたというか……」

【華乃】

「でっ、でも別に躊躇っていたわけじゃ……はあ？
怖気づいてたら顔突っこめって言われた？
言っただけ！」

【華乃】

「ただ、さっき突っこまれたのは私も挑発したから
仕方ない部分あったけど、今回は悪意が見え隠れ
してる気が……まさか面白がってやってないわよ
ね？」

【華乃】

「は？ 面白がってやったわけじゃないけど、私の
反応は面白い？」

【華乃】

「はあああああああ！？ あんた！ なに人の反
応、面白がってんのわよ！」

【華乃】

「こっちは真剣に……いや、あんただってふざけて
やったわけじゃないのは信じるけど……ああ
あーっもう！ 腹立つ！」

【華乃】

「そっちがその気なら……ちよっとシャワー借りる
ね」

【華乃】

「水でも喰らえ！ あははははは！」

【華乃】

「あはははははおもしろーい！ あんたもびしょ濡
れになればいいのわよ！ 私みたいにね！」

【華乃】

「あっ、ちよっ……やめ、やめなさいよ！ やめ
て、ちよっ……力づくでこられたら敵わないで
しょ！ やめて！」

【華乃】「嫌わよ！ このシャワーは私に残された最後の武器……これだけは渡さないからね！」

【華乃】「あつ、わかった止める、水止めるから、シャワー取りあげるのだけはやめて……あつ、あーっ！」

【華乃】「んぶツ！ やめて！ 私が悪かったから！ シャワーかけるのやめて……んぶぶツ！ ぷはっ！」

【華乃】「あんたちよっと！ ズルい！ やめて！ なんで私ばかりこんな目に遭うのわよ！」

【華乃】「そつ、そうだ、シャワー止めれば……」

【華乃】「はあつ、はあつ……あん、あんた……あんたが面白がるから攻撃しただけで、私はなんの罪もないのに、どうしてこういうことするのわよ……」

【華乃】「あ。ま、真面目に謝らなくてもいいけど……ま、まあ？ あんたにシャワー浴びせたときは、私も楽しんでたところあるし……」

【華乃】「私、海とかプールとか行かないからよくわからないけど、水遊びってこういうふうに楽しむものなのかなって思った」

【華乃】「子どものころ？ あー、そう……だね。子どものころは、周りの誰かに水かけて、きやつきや言って楽しんでたかも」

【華乃】「まあ生徒会みんなの前でこれやれって言われても無理だけどね！」

【華乃】「ひよりんや錦さんの前ではしゃいでる姿見せるのもなんだし……アメリは陽キャで私と海に対する認識違うだろうし……詩桜先輩の前で浮かれてるところ見せたくないし」

【華乃】「だから海へ行くのに目的が見出だせない点は変わってないんだけど……うん」

【華乃】「ま、あんたは私と同じ人種みたいだし？ 私が慣れてない感見せたところで、あんたも同じでしよって言えるし……」

【華乃】「思いがけずではあったけど、陰キャでオタク同士なら、海もプールも楽しいのかもしれないとは思えた。のは認める」

【華乃】「たっ、だたまあ繰り返すけど、みんなの前でこれは無理だけどね！ 男子とシャワー浴びせあつて、はしゃぐのなんて……」

【華乃】「て、ていうか、あんたが私の上からどいてくれないと、私、体起こせないんだけど……」

【華乃】「い、いやっ、別にいいけど？ 私もけっこう暴れたし……シャワーとられないように、あんたの腕掴んだり、したし……」

【華乃】「でもやっぱり、男の子って力あるんだね。全力で抵抗したのに、ぜんぜん敵わなかった」

【華乃】「押し倒されてなにもできない女の子の気持ち、ちよつとだけわかった、かも……」

【華乃】「あついや、もちろん好きな人相手にね！？ 私、強引なのは好きだけど、本気で嫌がってるのに無理やりは好きじゃないから！ お互い合意の上で！ 純愛は絶対！」

【華乃】「あつああつていうか、べべっべっ別に、あんたがどうこうじゃないからね！？ あくまで男女の力の差について理解したってだけだからね！？」

【華乃】「男の子と純粋な気持ちで水遊びしたのが楽しかったていうか……そこに童心へ帰る以外の感情が生じる可能性は万に一つたりともないのわよ！」

【華乃】「まっ、まあだから……水に慣れるっていう今日の目的は達成できた、かも。ありがとう」

【華乃】「あと、けっこう楽しかった……今日、あんたに付きあってもらってよかった。それも、ありがとう」

【華乃】「だけど、やっぱり恥ずかしいことはしてるよね、私たち」

【華乃】「あ、ごめん。今の言わなきゃよかった。取り消し」

【華乃】「だからごめんってば！ もう。反省してるから繰り返さないで……へくちよい！」

【華乃】「あー……さすがにこれだけ水の中にとると寒くなってきた。さ、いこいこ」

【華乃】「あれ、まだ脱衣所でワンちゃんが寝てる……どうすんのこれ、私たち」

【華乃】「は？ お湯を入れて二人で浸かる……湯船に？ なんなに恥ずかしいこと言いだしてんのわよ、あんた！」

【華乃】「水に浸かる特訓はいいけど、二人でお風呂なんて恥ずかしいでしょ！」

【華乃】「言いかた次第なところはあったけど……いくら私相手でも、ちよっとは考えなさいよ。もう……ばか」

0 3 . 幕間・いや私、FPSやらせたら無敵だけど

【華乃】「えっどうなってんの囲まれてんのこれ、えっちよっと前出て様子見てきて」

【華乃】「私？ え、無理なんだけど、私後方支援型だからほら、前出てって。大丈夫、敵いたら私が絶対に守るから。任せて」

【華乃】「え、ちよっと待って。いま補給物資とった？ それ欲しかったんだけど」

【華乃】「いやわかるけど、私エネルギーあんま残ってないから。ちよっとだけ待っててよ。次補給物資あったら私とるから」

【華乃】「じゃあ私、前出るけど。いやぜんぜん出るけど。敵いたらカバーよろしく」

【華乃】「あ、てかあれじゃない？ これ建物の中に補給物資あるやつじゃない？」

【華乃】「待って、あのロッカー絶対補給物資入ってるやつなんだけど。開けるときの無防備になるから気をつけて？ いやそんな都合よく敵に見つからないでしょ」

【華乃】「ほら見て、やっぱりこのロッカーに補給物資入って——」

【華乃】

「——あつやばいやばいやばい撃たれてる撃たれてる撃たれてる！ えっ本気で無理なんだけど守ってはやくカバー！ まゝもっつて！」

【華乃】

「待って無理なんだけど早くカバー、はやっ……早く！ 落ちる、落ちっ……無理だから！ もたないから！ 早く！ はやく！」

【華乃】

「あっああっ死んだ！ あと10秒……はやく！ あっああっ、3、2、1……はああああああああ！？」

【華乃】

「あれちょっとあんた、助けに来るの遅っ……いやだって、エネルギー残量ヤバかったから！ 補給物資探さなかったらどのみち負けてたから！」

【華乃】

「いや違うの、なんかロッカー見たら開けなくちゃって義務感に襲われて……いや悪かったけど。でも私は実力だけで負けたわけじゃないから。天に見放されただけだから」

【華乃】

「はーっもういい、今日はもうFPSはいい。やれば私強いけど、今日は運が私に向いてない。こういう日はなにをやっても駄目。まあ実力では負けてないけど」

【華乃】

「てかさ」

【華乃】

「なんでロッカー開けちゃったかって、ちょっとあんたにネタ振ろうと思ったの。ほら昔、あんたとロッカー閉じこめられたことあったでしょ」

【華乃】

「そう、わかるでしょ！？ あんたが隣りにいてロッカー見ると、つい開けなくなっちゃうわけよ」

【華乃】

「あれやバかったよね。そう、放課後で教室に誰もいないと思ったら人が帰ってきて……」

【華乃】

「そうそう経験することじゃないからね。一生忘れないと思う。いま思いだしてもすっごく怖かった」

【華乃】

「ま、あんたといっしょだから、当然ドキドキもしたけど。不謹慎かな？ うん、反省はしてる」

【華乃】

「懐かしいね、あれいつごろだっけ？ 二人で屋上から帰ってきたらさ——」

04. 待って男子とロッカーで二人きりとか最高なんだけど

【華乃】「はわわ斬り！ はわわ斬り！ 土間新陰流奥義・まっぷ手綱斬り！」

【華乃】「どりゃあああああああ！ 一気貫通・ノドグロ閃！」

【華乃】「え、突きは禁止？ 突きは禁止ね、ごめん。一度やってみたくて」

【華乃】「あっ！？ 待って待って、タイムのあとに攻撃しかけてくるのズルい……無理待って、やっぱ二刀流ズルくない！？」

【華乃】「あっ……ま、参った。だから叩かないで」

【華乃】「はあ……あんた剣道でもやってたの？ 強い？ 私も剣で戦うイメージだけはできてたんだけどなあ……」

【華乃】「ま、でも楽しかった！ ほうきで剣道、1回やってみたかったんだよね。転校前は女子がチャンバラやる年齢でもなかったし、転校してからはそのうのできる空気じゃなかったし……」

【華乃】「ごめんね、付きあわせちゃって。楽しかった？ あはは、私も楽しかった。こんなことできる機会、そうないもんね」

【華乃】

「てか、あんた痛くない？ 私の攻撃、けっこう当たってなかった？ ぜんぜん当たってない？ それはそれでム力つく」

【華乃】

「私？ 私もぜんぜん……そういえばあんた、武器ばかり叩いてたような？」

【華乃】

「なにあんた、私に氣遣って体にはぶつからないようにしたわけ？ そんなとこで騎士道精神発揮しなくても……」

【華乃】

「ま、でも、そういう男の子らしいところは好き。きゅんときた」

【華乃】

「え、なに。突然距離詰めてきて」

【華乃】

「今の『きゅんときた』でその氣になったとか？ あはは、まさかねー、そこまで……」

【華乃】

「え、ほんとにそうなの？ ここ教室なんだけど」

【華乃】

「や、まあ、この時間は誰も来ないだろうけど……むしろ閉門する時間が心配くらいだし。いま18時かあ……」

【華乃】

「ま、ちょっとだけなら。そこまで大胆ことはしないでしょ？」

【華乃】

「えっいきなりハグ？ けっこう大胆じゃない？ えー……あんた、ここからどうすんのこれ」

【華乃】

「やっ！ ちょっ……頼ずりくすぐったいって！
ていうか、くすぐったいだけじゃなくって……」

【華乃】

「ひやんっ！」

【華乃】

「ちょ、ちょちょちょおーっ！ くくびっ、
くびすじは……！ 声出ちゃうから！ ちょっ
と！」

【華乃】

「やっ、耳だめえっ！ みっ、耳はほんとだめ……
声、出ちゃうでしょ……やっ、きもちい……は
あっ」

【華乃】

「はあっ、はあっ……んっ、えっと……」

【華乃】

「理性のほうが強かったから我慢してたけど……学
園で……教室で甘いことするの、実はずっと憧れ
てて……」

【華乃】

「やっ、ちょっ、だから、やりすぎはだめええっ！
やあっ、あッ、はあっ、ああっ、やあ……やば
い、頭が甘々に溶ける……」

【華乃】

「あの……ちょ、ちょっと……ちょっただけでい
から……」

【華乃】

「私の胸……さわって……胸っていうか、乳首……
…」

【華乃】「あやバっ！ いま廊下の向こうのほうから声聞こえた！ 教室で聞き覚えある声！」

【華乃】「どっとうしよどうしよ近づいてくる！ 待ってリボンほどこいちゃったんだけど！」

【華乃】「えっ近づいてきた待ってボタンうまく止められないんだけど！ なんて意味わかんないんだけど無理iiiiiiii」

【華乃】「えっ、とりあえず隠れ……どっ、どこに！？」

【華乃】「バ、バレてない……よね？」

【華乃】「前の席のほう行ってくれてよかった……こっちの近くに来られてたら、とっくに見つかってそう……」

【華乃】「向こうの声もほとんど聞こえないし……このくらいの大きさなら、私たちの声も聞こえない……よね？」

【華乃】「く、苦しくない？ ふたり入ると、やっぱり狭いね……」

【華乃】「わ、私は平気……お尻にちりとりが当たってるくらいで……」

【華乃】「胸が、ちょっと苦しいかな……」

【華乃】「あっぜんぜん！ 動かなくていいから！ 気使わなくていいって！」

【華乃】「音するほうが怖いし……」

【華乃】「ていうか、すぐ帰らないってことは、もしかして話しこんでたりする……？」

【華乃】「会話の内容よく聞こえないけど……廊下から聞こえた声は、たしか晴菅田ちゃんと尾花畑さんだったような……」

【華乃】「ちよっと体ずらして。私が体ひねるスペース作って」

【華乃】「いまなにしてるのか、その隙間からちよっと覗いてみる……」

【華乃】「えっうそ！ 教室でがつつきスしてる！ それもかわいいキスじゃなくてディープ！」

【華乃】「あのふたり付きあってたわけ？ は？ めっちゃ舌絡めてるけど？ なんなら舌以外のところまで舐めあってるけど？ うーわ、そこまでする？」

【華乃】「えっ尾花畑さん、机の上に乗ってるんだけどなにをするつもり……待ってこれ以上見ちゃいけないやつなんだけど……うーわ」

【華乃】「えっ」

【華乃】「な、なにぎゅって……なんでもっと密着して……だ、だめだからね！」

【華乃】「あ、あのっ、きも、気持ちはわかるんだけど……ここっ、ここはやっぱり……！」

【華乃】「え？ 同じ姿勢がきつくて体勢変えただけ？」

【華乃】「ご、ごめん……過剰反応しただけだった……意識してたの、私のほうだった……」

【華乃】「だ、だって、あの……言っちゃ悪いと思って黙ってたけど……」

【華乃】「ふとももに……大きくなってるのあたってて……」

【華乃】「ごめっ、ごめんね！ ぜんぜん悪くないから！ むしろ嬉しいから！ わっ、私、男の子のそういうところ大好きだから！」

【華乃】「がっ、我慢させちゃって、かわいそうに思ってるくらい……わた、私だって、こんな状況じゃなければ……」

【華乃】「……ごめん、嘘ついた。こんな状況って言ったけど、二人きりで閉じこめられるのとか……かなり憧れてた……」

【華乃】

「恋愛脳発動していい状況じゃないのはわかってるけど……でも私、こじらせてる自覚あるから、好きな人と密室とか……ときめかないわけない……」

【華乃】

「ここが『キスしないと出られないロッカー』だったら、キスするの最後まで我慢して、エッチなことで全部したいくらいの気分……」

【華乃】

「あつだめ！ 煽ってごめんとは思うけど、見つかったら本気でマズい状況でそれは、やっぱりだめ……！ 私たち元生徒会役員だし……受験生だし……」

【華乃】

「ここ出たらいっぱいするから……させてあげるから……」

【華乃】

「いま足にあたってる大きいのは、私のふとももにたつぷりこすりつけてもらったあとに、とろとろになるまで口の中でかわいがって、先っちょのつるつるの部分手のひらでこれでもかと撫でまわしたあとに挿れさせてあげるから、今はだめっ……！」

【華乃】

「ええええええええなんで怒られてるの私！？ いまそんなこと言われたら誰だって？ ご、ごめん……でも、無事にここを出られたあとで、溜まりに溜まったものをお互い吐きだしたら、すごいえっちができそうだなって……」

【華乃】

「だから、今回は煽ってるつもりじゃなくて……！
悪かったから！ なにもしなければ見つかった
も言い訳できるし……実際まだなにもしてないん
だし、受験終わるまでは我慢しよう……？」

【華乃】

「二人きりになったら……いっぱいさせてあげるか
ら……」

【華乃】

「あ！ 待って、尾花畑さんたち、帰るっぽい……
服、整えてる……」

【華乃】

「思ったより早くてよかった……ここで最後まで……
……なんて可能性も考えてたから……」

【華乃】

「助かった……！」

【華乃】

「バレたらどうしようって、わりと真剣に脅えてた
……！ 一応言い訳は考えてたけど、ヘンな形に
噂が広まって、教室で白い目を向けられるのか
絶対嫌だったし……！」

【華乃】

「ん？ や、謝らないで。ていうか、その気になっ
てリボン外したの私だし……あんたが謝るなら、
私こそ土下座しないと」

【華乃】

「ま、楽しんじゃ……絶対ダメだけど、ドキドキし
たのは事実だし。身動き取れない場所で好きな人
と密着なんてね」

【華乃】

「脅えながらあんたに抱きしめられるの、私の全部を委ねたくなっちゃった……頼もしかったよ」

【華乃】

「じゃ、私の部屋行こっか。時間はとらせない、任せて」

05. 幕間・いや私、エロゲやらせたら最強だけど

【華乃】「え待って新しい発見。CV…カレシの声で聞くエロゲ最高なんだけど」

【華乃】「えーっこういう楽しみかたってあるんだ。今後もう、なんのエロゲやっても、主人公があんたの声で再生されそうで最高なんだけど」

【華乃】「は？ いや私は恥ずかしくないし。私のカレシはあんたなんだから仕方ないでしょ。恨むならエロゲやるカノジョを持った自分の感性を恨みなさい」

【華乃】「それよりほら、続き読んで。いまめっちゃ楽しんでるんだから。あ、モノローグは読まなくていい。台詞だけ読んでって」

【華乃】「あはははははは！ 告白の台詞、めっちゃ情感込めて読んでるあはははははは！」

【華乃】「いやがつり入りこむじゃん……待って真顔で読むのやめて、声湿り気帯びすぎなんだけど！ おなか痛いんだけど！」

【華乃】「あーカレシの声で聞く愛の言葉ウケる……ヒロインより私が落とされそう……絶対に笑ってはいけないエロゲーみたいになってる……」

【華乃】

「でもところどころ解釈違いはあるから、そこで真顔には戻るよね。いやさっきの台詞熱い感じで読んでたけど、ここ、もっと耳元で囁くかんじじゃない？」

【華乃】

「愛してる」

【華乃】

「こうじゃない？ フツーわざわざ顔近づけて言わない？ いや言うって。言う言う。むしろ普段から言いなさいよ。は？ 別にエロゲに限った話じゃないからこれ」

【華乃】

「なにはつきりしない返事してんの……いいからもう、早く続き読んで。ここからが大事なんだから」

【華乃】

「は？ あんた『マッサージ』の発音『マ（→）ッサージ』なわけ？ 私と発音違うんだけど」

【華乃】

「あ、大人のマッサージ始まった……あー主人公の顔入れちゃうのは減点かなー個人的に。てかサイズ大きくない？」

【華乃】

「に、してもー……ゲームの中とはいえ、こうして一日中セックスしかしてないエロゲ見てると、付きあいたての夏休みとか、まだ同棲してないころ泊まりに来た日を思いだすよね」

【華乃】「そうそう、去年の夏休みの――…受験生だからはじめは遠慮してたのね。1回火が点いちゃうと、もうね」

【華乃】「まあでも、1日中エッチして過ごすなんてのも学生間にしかできないだろうし、それはそれでいい経験になって――」

【華乃】「――は？ しかけてきたのは私？ や、それはそうなんだけど、止めなかったあんたにも責任が……」

【華乃】「いやごめん！ 止める間もなかったのは認める！ だ、だって、カレシがお泊りに来たら、朝フェラしてみたかったんだもん！」

【華乃】「そうは言うけど、私だってあのころはまだ照れがあったよ。今はふと見たくなったら脱がすし、触りたくなったら触るけど」

【華乃】「そう、あれはあんたがお泊りで勉強会に来た、翌日の朝――」

06. は？ 朝起きたらカレシの寝顔？ 好きだが？

【華乃】「んむちゅ、ちゅ、んむ……ちゅっ、んむう、んちゅっ……ちゅっ、ちゅばっ……」

【華乃】「んちゅっ、ちゅっ、んちゅううう……ちゅっ、んちゅっ、ちゅう……んむ、ちゅっ、ちゅうっ……」

【華乃】「ちゅうううう……ちゅっ、ちゅうっ……んちゅ、ちゅっ、ちゅうっ……はっ、はあっ……」

【華乃】「あ、おはよ。ごめんね、起こしちゃった？」

【華乃】「いや、見ての通り朝フェラだけど……ちゅっ、ちゅうっ……」

【華乃】「や、だって、朝起きてそこに好きな人の顔があれば、してみたくなるし？」

【華乃】「反応ないのは寂しかったけど、しぼんでるこれはかわいいから、吸ってあげるの楽しいし……ちゅっ、ちゅうっ」

【華乃】「はあっ……てかさ」

【華乃】「あんた、男子は朝起きたら大きくなる的なこと言ってなかった？ ほら、徹夜明けの……えと、初めてしたときに」

【華乃】「いっ、いやっ、そのとき最後まではしてないけど……」

【華乃】「そうじゃなくて『した』って言うのは、はじっ、初めて口で……」

【華乃】「は！？ 恥ずかしいに決まってるでしょ！」

【華乃】「いつ、いくら普通に毎日する関係になったって言っても、初めてした日のことだと思いますと、今でも普通に恥ずかしい気持ちにはなるのわよ！」

【華乃】「いやっ、ドキドキだったからね！？ あのとき興味はあったし、男の子の反応見たかったからできたけど、内心では引かれないか不安だし、自分でできるのか不安だし、何から何まで初めてだしで、ほんとドキドキだったからね！？」

【華乃】「初めて触れる男の子の体だったし……初めて見る部分だったし……」

【華乃】「なにより、あんたのこと好きとか愛しいとか思いはじめて胸のなか甘酸っぱさでぐちゃぐちゃだったわよ」

【華乃】「あーちがくて。なんでいまこんな話？ 別にあんたを喜ばせるために思い出話したわけじゃないけど、喜んでくれるならそれはそれで、もっと甘い空気のとくに……いや、今も甘い空気ではあるんだけど……」

【華乃】

「だかつ、だから私が言いたいの……ここ！ここがしんなりしてたわけ！今は大っきくなってるけど……うわ、ほんとにかっちかちなんだけど！」

【華乃】

「でもあんた、男の子は朝起きたらみんなかっちかちになってるって言ってなかった？」

【華乃】

「え？ 朝だからというより、あのときは疲れてたのが大きい？ ふーん、じゃあ普段は、朝ここまでかっちかちにはならないわけ？」

【華乃】

「なるときはなる？ どっちなの、もう！」

【華乃】

「いや……寝てる間はしんなりしてたから、あのときもしかして、エロいこと考えてると思われたくなくて嘘ついたのかなって……」

【華乃】

「嘘はついてない？ ふーん、そう……じゃあ今日はたまたまなんだ？」

【華乃】

「ただあのときエロいことは考えてた？ ああもう、ほんとどっちなの！ さっきから！」

【華乃】

「ま、まあでも、あのときエロいこと考えてたっていうのは、うん……私としては嬉しい事実なわけ。うん」

【華乃】

「俄然やる気になってきたし、あの日を思いだしながらしちゃお。ドキドキした当時の気持ちを振りかえりながらすると、胸がきゅってなる」

【華乃】

「好きだよ」

【華乃】

「んむ……ちゅっ、んむ、ちゅう……ちゅむっ、ちゅっ、んちゅううう……」

【華乃】

「んちゅっ、じゅるう……じゅぶっ、んちゅっ、んむちゅっ……じゅぶ、んじゅぶっ……」

【華乃】

「んちゅっ、じゅぶっ、んちゅぶるっ……じゅぶ、んじゅぶっ……じゅぶ、んちゅっ、ちゅぱっ」

【華乃】

「はっ、はあっ……えへへ、完全に大きくなった……あの日とどっちが大きいかな？」

【華乃】

「まあ、あのときはお互いに初めてで、期待値マックスだったから、特別固くなってた気がするけど……私も本物見るの初めてだったから、尋常じゃなく興奮してたし……」

【華乃】

「その分、上手くはなかっただろうから、今のほうが気持ちよくさせる自信はあるけどね。初々しさがなくなっただけ、技術を身に着けたみたいなの？」

【華乃】

「だから、今はまだ初めてのときのほうが硬くなってたとしても、これから気持ちよくしてかっちかちにしてみせる……あむん」

【華乃】

「んちゅっ、ちゅっ、んむっ……んちゅ、ちゅばっ……ぢゅるっ、んちゅううう……ちゅばっ」

【華乃】

「はっ、はあっ……そんなに気持ちよさそうな顔されちゃうと、朝から火が点いちゃうじゃん……へへへ」

【華乃】

「ごめん、我慢ならないから体も舐めさせて……れろっ」

【華乃】

「はっ、はあっ……男の子の体おいしい……男子の胸板最高……れろっ、れろ……」

【華乃】

「それと乳首……！ ごめんね、私、男の子の乳首が三度のたこ焼きより好きだから……ちゅっ、れろっ……」

【華乃】

「はあっ、はあっ、おいしい……男の子の乳首は全てを幸せにする……全世界の男子は、等しく乳首の周りだけ切り取った服を着ればいい……れろっ、ちゅっ……」

【華乃】

「キス……もしたいけど、フェラしたあとだから、歯を磨いたあとにしようね……そこでまた火が点いちゃうかもしれないけど……」

【華乃】

「こっちは寂しかった……？ 手でするほうが気持ちよかった？ 口の中で出したい？ えへへ、そうだよ……」

【華乃】

「あむ……んむっ、ちゅっ、ちゅうっ……はっ、おいし……んむっ、ちゅっ、れろお……んちゅっ、れろっ……」

【華乃】

「はあっ……イキそう？ 朝から出したら辛い？ 出せるならいっぱい出してほしいなあ……ちゅっ、んちゅっ……」

【華乃】

「朝一番搾りの牛乳……なんて言ったら下品か……あむっ」

【華乃】

「んちゅっ、んッ、んむっ、んちゅっ……ちゅっ、んちゅっ、ちゅばっ、んちゅっ……ちゅぶっ」

【華乃】

「はッ、はあっ……んちゅっ、ちゅばっ、ちゅぶっ……んちゅっ、じゅぶ、じゅぶんっ……はッ、イキそう……?」

【華乃】

「朝からごめんね……お口の中にいっぱい出して……んちゅっ、じゅぶっ、じゅぶるっ……じゅぶ、んじゅぶっ、じゅぶんっ」

【華乃】

「ぶはっ、はっ……イケる……? イケそう……? いっぱい出して……んちゅっ、じゅぶっ、んちゅっ……じゅぶっ」

【華乃】

「じゅぶるっ、じゅぶっ、じゅぶっ、じゅぶんっ！ じゅぶ、じゅぶるっ……じゅぶ、じゅぶんっ！」

【華乃】

「んむっ！？ んむうううううーッッッ！ んむっ、んッ、んむっ……」くっ」

【華乃】

「ちゅっ、ちゅうううっ……んちゅっ、じゅるっ、ごくっ、じゅるうううう……」くん」

【華乃】

「はっ、はあっ……おいしかった……朝はやっぱり搾りたて……ってね！」

【華乃】

「いやごめん、下品だったのは認める。や、ごめん、ほんとごめん。怒らないで」

【華乃】

「でもそれとは別に、朝から勝手にしちゃってごめんね……つい我慢できなくなっちゃって」

【華乃】

「これが毎朝だとキツイ？ キツイよね？ あはは、体力的にキツイ日は前もって言うておいてね」

【華乃】

「さすがにいつもいつもってわけじゃないけど……目覚めてびっくりしてこっち見るあんたの顔、かわいかったから……」

【華乃】

「なんならそれが目的で朝フェラするまである。明日は乳首舐めてるかもしれない」

【華乃】

「朝起きてびっくりした顔した直後に『んッ……』なんて声出されたら……ヤバイ萌える。え、どうしよう。これ萌えない？ ヤバくない？」

【華乃】

「あ、引かないで、別々に寝るとか言いださないで。がっ、我慢するから……乳首は週イチ……いや、月イチくらいで！」

【華乃】

「だって一日の始まりにカレシの萌える顔と声なんて最高じゃない？ きつと健康にもいい」

【華乃】

「んーっやる気出てきた！ 今日も一日がんばるぞ！」

07. は？ カレシの喘ぎ声？ 萌えるが？

【華乃】

「はー……」

【華乃】

「ひと休みしない？」

【華乃】

「あんたが来るのわかってたから、焼き菓子買って
おいたんだけど。そろそろおやつの時間じゃない？」

【華乃】

「そうそう、あのケーキ屋さんの。ここからめっ
ちゃ近いよね、歩いて3分かならないくらい。直
線距離なら1分で行けそう。それはつつい買っ
ちゃうよね」

【華乃】

「さすがにケーキは重いし、記念日に食べるとき特
別感欲しいから、今日は焼き菓子にしておいたけ
ど。実は私も、ケーキ以外のお菓子買うの初めて
かも」

【華乃】

「ま、そうやって喜んでもらえるなら、私も嬉し
い。じゃあ紅茶いれるね。私の部屋いこ」

【華乃】

「ん？ ああうん、ここでもいいけど……テーブル
挟むより、隣で肩くっつけながら食べたい気分」

【華乃】

「お菓子だけじゃなくて、いちやいちやでも糖分摂
取したいしね。さ、いこいこ」

【華乃】

「んー、おいしかった！」

【華乃】「ね、あのお店、ケーキだけじゃなくて焼き菓子もおいしいんだね。全種類制覇してみよっかな」

【華乃】「ま、ひとつだけだと買いづらいし、あんたが来るとき限定だけだね。早く二人で暮らせたらいいのね」

【華乃】「はー、も一個食べたくなってきたなー、近くだし買いに行っちゃおうかな。二人で部屋着のまま近所に行くもの行くのも同棲っぽくてよくない？」

【華乃】「ま、太るから2個は無理なんだけどねー。全種類制覇なんてしたら、胸の肉が全部おなかに付いて、あんたに嫌われそう」

【華乃】「だからー……別のもので糖分補給しようかな。あんたの唇に、まだシロップ付いてるよね？」

【華乃】「舐めるけど、いいよね？ 唇隠さないでね」

【華乃】「ちゅっ……ちゅっ、れろっ……れろ、れろっ……ちゅっ……」

【華乃】「くすぐったい？ ちょっとだけ我慢してね……れろっ、ちゅっ……」

【華乃】「んー……えへへ、甘っまい」

【華乃】「えーやっぱい、あまっあまのキス萌える……昼間から自分の部屋でいちゃつけるの最高かもしれない……」

【華乃】「ね……押したおしちゃっていい？ いいよね、私の部屋なんだから」

【華乃】「ん？ 積極的？ そうだよ、見てわかんなかった？ ゴリゴリに盛ってるけど」

【華乃】「真面目に2時間も勉強しているとエッチしたくならない？ ていうか、なった」

【華乃】「勉強してるときの顔とかすこすこのすこだし……途中までは真面目にやってたけど、カレシの真顔なんて大好物目の前に出されて、夕方まで集中力がもつわけないでしょ」

【華乃】「朝いっぱい出したし、体力的にキツイなら、夜まで待つけど……？ それでも、いっぱいキスはすると思うけど」

【華乃】「平気そう？ 大丈夫？ じゃあ……いっぱいエッチしようか」

【華乃】「んむっ……ちゅっ、ちゅっ……ん、まだ唇甘い……んむ、ちゅっ……れろっ、はあっ……」

【華乃】

「れろっ……はっ、はあっ、ちゅっ、れろっ、れろお……はッ、はあっ……キス好き……んむう……」

【華乃】

「ちゅっ、んむっ、れろっ……ちゅっ、ちゅっ……ちゅっ……ん、もう顔中にキスしたい……ちゅっ」

【華乃】

「んっ、やっ、嬉し……キスしてもらうのも好き……いっぱいして……」

【華乃】

「はあ……ごめんね、すぐくっつきたがって……いっしょに暮らしはじめたら、もう少し落ちつくと思うから……」

【華乃】

「ずっとこのままでもいい？ そう言ってもらえると嬉しい。お互い暇ならずっとくっついてたい」

【華乃】

「ね、さわって……私の体の色んなところ」

【華乃】

「んっ、あっ、胸……やっ、そこ真っ先にいじってもらえるの……男の子っぽくて好き……」

【華乃】

「自信のあるところだから、がっついてもらえると嬉しい……やっ、んう……んっ」

【華乃】

「ね、吸って……頭ぎゅってしながら、口でされたい……んっ、強めに吸って……」

【華乃】「やつ、んツ、はあっ……あっ、やつ、きもちいい……やんっ」

【華乃】「んツ、やんっ……はっ、はあっ、ね、噛んで……ちよっと強く……やつ！ んっ、やつ、歯でくりくりされるのきもちいい……やあんっ！」

【華乃】「あっ、やつ、んツ、んう……はっ、好き……愛しい……やつ、好き好き……あっ、好きな人に胸いじってもらえるの、きもちいい……」

【華乃】「はあっ、はあっ……やつ、好き……私の胸いっぱい吸ってくれるカレシ、見てるだけで好き……きもちよくしてあげたい……」

【華乃】「あっ、そ、そだ！ 挟んであげよっか？ そんなに気に入ってくれたなら、私の胸でご奉仕してあげたい……」

【華乃】「パイズリしながらだと、カレシの顔よく観察できるし」

【華乃】「ま、まあ、自分の体使って気持ちよくしてあげると、尽くしてる実感湧くしね！」

【華乃】「いっぱい気持ちよくしてあげるからね……わっ、朝とおんなじくらい大っきくなってる……あんなにいっぱい出したのに」

【華乃】「体力ある男子は嫌いじゃない……今日はガーリック多めの料理作っちゃおっかな？ なんて」

【華乃】「それと期待されるのも嫌いじゃない……見た目に自信のない私が、これだけは他の人にも負けないうって思ってる自分の部分だからこそ……めっちゃ本気出すからね」

【華乃】「フェラしてあげたい気持ちもあるけど……胸だけでイカせてみせるのが私の誇り。今の私、ちよつとカッコよかったからね。誉めてくれていいからね」

【華乃】「まあただ、私がどんなに練習しようと、それが実際に気持ちいいか判定できるのは、あんなだけなわけで……」

【華乃】「大きさと硬さである程度判断はできるけど、気持ちよかったときは教えてね。どんな動きが喜んでもらえたのか、覚えておきたいものもあるし……」

【華乃】「あとやっぱり、料理をおいしいって言ってもらえるのと同じくらい、エッチを気持ちいいって言うってもらえるのは嬉しい」

【華乃】「いずれは、私の胸に挟まれて、気持ちよすぎて限界を迎えたあんたの顔とか見たい……切なそうなカレシの顔大好き……うへへへ」

【華乃】

「あと毎回言ってるけど、声出したければ出していいからね。私は喘ぎ声をあげるのが女子だけじゃないって、いつまでも信じてるからね」

【華乃】

「なんなら今も喘いでくれていい……ほら、私の全部胸に埋まっちゃった気分はどう……？ これでこねこねされたら気持ちいいよね……？」

【華乃】

「左右から締めつけられて窮屈にしてるんだって思うと……やだ萌える。圧迫されて逃げ場のない気分はどう……？ 気持ちいい……？」

【華乃】

「はあっ、はあっ、呼吸できずにあっぷあっぷしてる姿想像するとかわいい……このまま窒息するみたいに、出させてしまいたい気もするけど……」

【華乃】

「私の胸の中で射精して、ぐじゅぐじゅになった状態のまま、めいっぱい掻きまわしてしまいたい気持ちもあるしね……」

【華乃】

「自分の出したものを擦りつけられて感じてしまう惨めさに歯噛みしつつ、でも快感には逆らえず気持ちよくなってしまう男の子の顔想像すると……ヤバいくらい萌える」

【華乃】

「でも気持ちよくなって、真っ赤になった先っぽみたいから、ちょっと呼吸させてあげるね……どんなお顔してるかな……？」

【華乃】

「やだ充血して真っ赤になってる先っぽかわいい……！
……！ 気持ちよさそうにぴくぴくしてる……！」

【華乃】

「うっ、ああっ……！ 胸だけでイカせてしまいたいけど、いま舐めたらどうなってしまうんだろうという欲求に抗えない……！」

【華乃】

「耐えるのよ、常磐華乃……！ 唇は添えるだけ……！」

【華乃】

「でもやっぱりごめん我慢できない、んちゅっ！
れろれろろっ……れろっ、んちゅうううう！」

【華乃】

「はあっ、はあっ……待って違うの、これは滑りをよくしようと唾液を付けただけ……フェラではない、私の本気はこんなものじゃない……！」

【華乃】

「いやだって、こんなに充血させつつ出すの我慢してぴくぴくしてるところ見たら、ここへ刺激を加えたらどうなってしまうんだろうという知的好奇心を抑えられるわけじゃないじゃない」

【華乃】

「私の誇り？ うん、そんなものを大切にしていた時期があったかもしれない。だけどそれは過去の話……以前の私……」

【華乃】

「でもいいの、目的は好きな人を気持ちよくさせることだから……」

【華乃】「というわけで舐めちゃうね、れろっ、ちゅっ……ちゅっ、れろっ……」

【華乃】「あっ、すごく気持ちよさそう！ ごめん待って無理、そうだね、胸で締めつけるだけでも気持ちいいのに、両方すればもっと気持ちいいのは、わかりきっていたことだね……れろっ、ちゅっ」

【華乃】「あああああ唾液でべとべとになって充血してるのほんと無理……あっぶあっぶしてる……」

【華乃】「もう絶対に私の目の前でイカせる、最高に気持ちよくさせてみせる……！」

【華乃】「ちゅっ、れろっ、れろれろっ、ちゅっ……れろっ、ちゅうううっ……！ はっ、はあっ……！かわいい、いまめっちゃかわいい……萌える……！」

【華乃】「イク寸前が一番萌えるってどゆこと？ 最高の瞬間はいつも刹那で消えていく……その尊みを刹那で忘れてしまう……だからその一瞬を何度も味わうために、私はパイズリをするの……ちゅっ」

【華乃】「はあっ、はあっ……ほらイキなさい、イッちゃいなさい……この瞬間のためにエッチしてるまである……嘘ごめん、自分が気持ちよくなりたいものがある……」

【華乃】「あああ手が足りない……カレシをイカせながら自分でもしたい……はあっ、はあっ……ちゅっ、れろっ……んちゅっ……」

【華乃】「はッ、はあっ……イクの？ イキそう？ まだまだ耐えて……耐えに耐えたあとには、きっと最高の瞬間が待っているはずだから……」

【華乃】「なんて、本当は、出すの我慢して耐えてるカレシの顔が萌えすぎるだけ……もっとギリギリの表情を見せて……！」

【華乃】「えっもうイクの！？ あああああ嬉しいけどもつと悶える顔見たかったああああああ……この時間だけはいつも一瞬にして永遠……いいの、いっぱい気持ちよくなって……私の胸に出して……」

【華乃】「もう我慢できないなら、私も遠慮しない……ほーら、こねこねこねこね！」

【華乃】「唾液足りないかな……んちゅっ、ちゅっ、れろっ、ちゅばっ、れろお……はッ、はあっ……最高……」

【華乃】「あっ！？ イクの……？ イツちゃうの……？ ほらイツて……！ 一番気持ちいい顔を私に見せて……できれば声も聞かせて！」

【華乃】「あっ、出たあ！ あっイツてるイツてる、やっ、射精してるところ、すっごくかわいい……！」

【華乃】「射精中に吸ったらどうなっちゃうのかな……ごめん、知的好奇心を抑えられない！」

【華乃】「ちゅっ！ んちゅううううう！ ぢゅうううっ！ んじゅるるるううううう……」

【華乃】「んむっ！？ やだ悶えるカレシかわいすぎ……！ えっかわいいやだ無理、もっと必死なところ見せて……ちゅっ、ちゅううっ」

【華乃】「ん、ごくっ……んぐ、ごくっ……はあっ」

【華乃】「やっばい、すっごくかわいい……手コキもだけど、パイズリはこれがいいよね……出したあとまでかわいがれるし、そのときの悶える顔を特等席で眺められる……」

【華乃】「思ったよりもいっぱい出たけど……まだ、大丈夫？ イケる？ あともう1回だけ、元気出せそう……？」

【華乃】「ごめんね、あんまり事後の反応がかわいかったから……挿れるの我慢するの無理……私も気持ちよくさせて……」

【華乃】「んッ、入って……きたあ！ よかった、あんまり出しすぎて、今日はもう大っきくなるの無理かと思った……」

【華乃】「去年の夏休みは、もっとたくさんしたもんね……それこそ一日中、毎日毎日……」

【華乃】「あのころ……はッ、んっ……半分本気で、毎日セックスだけして過ごそって言いそうになったんだよね……少なくとも、思ってたはいた……んっ」

【華乃】「好きな人と、だらしない毎日送るの、ちよつと憧れあったし……あっ、やっ！」

【華乃】「ま、今となっては、がんばってるあんたを見るのも好きだから、ほんとの意味で一緒に暮らしたって思えるようになったけど……」

【華乃】「あっ、んッ……性格も体も相性バッチリなんて、最高……！　ていうか奥、きもちいいッ……！」

【華乃】「あっ、やっ、無理ッ……！　抱きつかせて……！」

【華乃】「あッ、はあっ……！　そこ、きもちいい……あっ、やんっ！　奥、当たって……やあんっ！　ズボズボするのきもちいいッ！」

【華乃】「あん、だめっ！　やあん、ひあッ、そこ、すッ……ふあッ、入り口ぐりぐりやああッ……！」

【華乃】「はッ、無理っ、こんなっ、あッ、男の子の、知っ
たら……自分の手だけで、我慢なんて……絶対で
きない……！」

【華乃】「やッ、きもちいいッ……あッ、奥だめえっ！ あん
ッ！ もう無理ッ！ あんたナシじゃ無理ッ……
こんなきもちいいの、我慢できないっ……！」

【華乃】「やあっ、好きッ……！ 毎日しよっ……いっしょ
に暮らしたら、お休みの日に、エッチなことし
よっ……きもちいいこととして一日過ごそっ……ひ
あんっ！」

【華乃】「やあっ、きもちいいッ……！ 好きっ、好き好
きッ……！ やんっ、エッチ好きいっ……毎日こ
れしたいっ……ひああああんっ！」

【華乃】「あっ、すごくいいのっ……！ 私の体にぴったり
嵌まるの……いち番きもちいところにあたって、
頭真っ白になるう……やあんっ！」

【華乃】「やっ、好きッ……こんなの一生離れられない……
好きッ！ あっ！ そこ、奥っ……！」

【華乃】「こんなに相性いい人……やっ、もう好きッ……全
部好きッ……！」

【華乃】「んちゅっ！ んむう、ちゅっ、んちゅっ、れ
ろっ、ちゅっ……んちゅ、れろっ、んちゅっ……
んちゅる、れろっ、ちゅっ！」

【華乃】「はッ、はあっ……キスも好き……エッチも好き、全部好き、大好きっ……！」

【華乃】「あッ、やあっ！ あッ、もっと激しくして……あっ、やんっ！ それ、好きいいっ！」

【華乃】「あ、イクっ……！ そんな激しくされたら、イッちゃう……！ やっ、最後までいじめて……今のそれ続けて、奥ぐりぐりして、最後までイカせてっ……！」

【華乃】「イクっ、あっ、やあっ、きもちいッ……！ あッ、だめっ、やあっ、ひあんっ！」

【華乃】「あっ、だめええっ……！ やあっ、きもちいいの我慢できない、イッちゃう、やあっ、好きな人の前でイッちゃう……あっ、ひああっ、ひとりじゃ、やあっ……！」

【華乃】「イクっ、あッ、イキたいっ……あっ、いっしょにイキたいっ……！」

【華乃】「イクっ、あっ、イクイクっ……あっ、やあっ！ やああんっ！ いっしょに……あっ、そこっ！ だめええっ！」

【華乃】「あッ、もうだめっ！ イッっ、あっ、いっしょに……あ、イクっ！」

【華乃】

「ごめん、私、もうだめっ……あ、イクっ！ あ、やんっ！ やばい、すごいきちゃう……あ、だめっ！ イクううっ！」

【華乃】

「あっ、ああッ、やあああああッ！ だめっ、これだめえっ……！ きもちよすぎてだめっ……！」

【華乃】

「あっ、イクっ、イッてる……あ、やだっ、止まらなっ……すっっ、やあんっ！ 波が、あ、だめえっ……！」

【華乃】

「ああッ、はあっ、やあっ、はあっ……きもちよすぎて……だめ、頭おかしくなりそう……」

【華乃】

「あー、めっちゃよかった……やっぱりカレシをさんざん焦らしてからイカせるの、最高すぎて……そのあとでエッチするの燃える……火偏の意味で燃える……」

【華乃】

「あ、そうだ……毎回謝ってる気もするんだけど、かわいって言ってごめんね……この単語、男の子はあんまり喜ばない人もいるってわかってるのに……」

【華乃】

「萌えが極限に達するとどうしてもね……素の自分が出ちゃって……でも多分また言っちゃうから、今のうちに謝っとく……私の『かわいい』って萌えるって意味だから、草冠の……うん……」

【華乃】 「いや、いい……私には言わなくていい……だから……」

【華乃】 「いやうん、そうだね……自分が言ったんだから、あんたに言われても受けいれなくちゃね……う、嬉しい……正直、すっごく嬉しい……」

【華乃】 「でもあんまり私を喜ばせると、またしたくなっちゃうけど大丈夫？ あんた今日、いっぱい出したでしょ？」

【華乃】 「私が我慢？ するわけないでしょ。カレシに萌えたらすぐエッチな生活。最高でしょ？」

【華乃】 「え、勉強？ お仕事？ んー……明日からがんばろっ！」

08. は？ カレシとお風呂？ 最高なんだが？

【華乃】

「疲れたー……」

【華乃】

「なんか今日、勉強してただけなのにやたら疲れなかった？」

【華乃】

「他なにかしたっけ？ 買いものくらい？ それも、ほんのちよつとすぐそこまで出ただけだし……」

【華乃】

「え？ 朝も昼もエッチしたから？ そ、それはありそう……あはは」

【華乃】

「んー、で、でも……去年の夏休みはもつといっぱいしたような……あん、あんた、ちよつと体力落ちてるんじゃないの？」

【華乃】

「や、まあ、あのころ……あのころって言っても1年前の話だけど、いま思いだしても頭おかしかったからね……1日に3回も4回も、5回も6回も……」

【華乃】

「お互い明らかに意識してるんだけど、それだけが目的と思われたくないから、絶対はつきりと口にはしないみたい……でも、ちよつとでも体触れたら、もう我慢できないみたい」

【華乃】

「や、や、実際、それだけが目的ではなかったよ。会うの自体が楽しかったし、嬉しかった。男の子が部屋へ遊びに来てくれるっていうだけで、私、浮かれてたし」

【華乃】

「好きな人ができて、その人と二人きりで会うのも、会って話すのも、会話の流れでお互いの体に触れるのも、そこからエッチしちゃうのも……なんか全部楽しかった」

【華乃】

「付きあいはじめだし、初めて見る男の子の体だったし、エッチにも興味津々だったし……」

【華乃】

「好きな人とのエッチ、気持ちよかったし……」

【華乃】

「気持ちいいって言うなら、今のほうが気持ちいいはずだけどね。お互いに色んなこと覚えて、相手の気持ちいいところもわかってきたし……」

【華乃】

「そう、気持ちいいんだよね。今のほうが絶対」

【華乃】

「付きあいはじめは毎日が楽しくて仕方ないってかんじだったけど、今は毎日が気持ちいいというか、心地いいというか……」

【華乃】

「なんかね、1年前はいっしょにお風呂入るのでもドキドキして会話するどころじゃなかったけど、今はなんか普通に自然体で話せる」

【華乃】

「というか、うちの親が万が一早く帰ってきたらどうしようだったり、そもそも帰る時間があるの前提だったりで『湯船にゆっくり二人で浸かる』なんてできなかったからね。自然体以前の問題だった」

【華乃】

「私と違ってあんたは、私の家のお風呂で落ち着かなかっただろうし……ま、そこはあんたの家の事情だったたり、私だけにホテル代出させたくないだったたり、あんたの都合もあったから仕方ない面もあったけど……」

【華乃】

「だからこうして、帰る時間を気にしないで、二人でゆっくりお風呂に入れるの……お風呂を出たあともバイバイせずに二人で同じおふとん入れるの……幸せだなんて思うよ」

【華乃】

「……たださあ、お風呂でこんな風に向かいあって座ると、付きあった直後よりも、付きあう前思いだすよね」

【華乃】

「そうそう。合宿行く前に泳ぐ練習したときの。水着は着てたけどね」

【華乃】

「いや、今だから言うけど、あるとき……顔に水を浸けて潜ったとき、ちよっと……当たったんだよね」

【華乃】

「いやっ『それ』が『それ』だったのかには確信抱けなかったから、けっこうドキドキだったけど……え、あれそうなの？ どうなの？」

【華乃】

「あ、いまちよっと大っきくなった？ てことはやっぱりそうだった？ 当時を思いだして興奮したりする？」

【華乃】「……なんて、私もあのときの話をしたら、興奮しちゃったかもしれない」

【華乃】「あのときは触れなかった『それ』に……いまは触れられるんだなあって」

【華乃】「ね、やっぱり大きくなってる……握ってたら、もっと大きく……」

【華乃】「水の中で擦られるのって、気持ちいいの？ 擦られるかんじはしなそう……強く握ったほうがいい？」

【華乃】「というか……手コキするなら、ぬるぬるしてたほうが気持ちいいんだよね？ せっかくお風呂なんだし……」

【華乃】「体力的にキツイならやめておくけど……ね、そこ座って。うん、縁」

【華乃】「さっき洗ったばかりだけど……さっきは、今日いっぱい出したからと思って手加減したけど、まだイケるなら、丹精込めて綺麗にしてあげる」

【華乃】「あはは、えっろ……なんか泡立たせると、ローションよりもエロくない？ 絵面やっぱ……」

【華乃】「あーなんか、私のほうが興奮してきた。めっちゃ音するし……どう？ 気持ちいい？」

【華乃】

「石鹸だから、舐められないのが残念かなー……うわ、すっごく硬くなってる……今日、あんなにいっぱい出したのに……そんなにいいんだ？」

【華乃】

「じゃあー……こんなに滑りがいいんだし、先っぽ握ってー……逃げないで。大丈夫、怖くないよ？」

【華乃】

「ほーら、先っぽわしゃわしゃわしゃー！あはは、のけぞるくらい気持ちいい？」

【華乃】

「やだかわいい、俄然火が点いてきた。これだけぬるぬるなら、けっこう強く握っても大丈夫だね？」

【華乃】

「根本から先端にかけて、回転しながら上下するのが気持ちいいって……鯉のぼりって言うらしいけど、笑うよね。いかにもな下品さがTHE・エロ用語ってかんじする」

【華乃】

「ただ下品ではあっても、なにをどうすれば気持ちいいのかは、今も昔もかわらないだろうし……先人の知恵は積極的に取りいれていきたいよね」

【華乃】

「と、いうわけでー……そおーれ、ぐりぐりぐりんっ！あはは気持ちいい？えい、ぐりぐりんっ！」

【華乃】

「手コキって、奉仕したげてる感と、責めてる感が同時に味わえて楽しいよね……あ、あんたにはわからないか」

【華乃】

「ここかわいがるの大好きだからね、私……これから毎日洗ってあげよっか？ あははっ」

【華乃】

「いい子、いい子……このままずっと焦らして、イキそうなギリギリの時間を永久に楽しみたい私がいる……」

【華乃】

「あーかわいい……ずっとかわいがってあげたい……でもひと思いにイカせてしまいたい破滅願望も覚える……」

【華乃】

「はあっ、はあっ……ぬるぬる落ちてきたから、シヤワーで一度流すね……」

【華乃】

「え、なに？ ピクってしたけど、痛かったの？」

【華乃】

「そうじゃなくて気持ちいい？ シヤワー程度の刺激で？ ああもう、なんてかわいらしい器官なのここは！」

【華乃】

「綺麗になったし、舐めちゃお……たまたまがいい？ たまたまが気持ちよかったの？ れろっ……」

【華乃】

「んむ、れろっ、ちゅっ……ちゅうっ、れろっ、ん、ちゅうっ……れろっ、はっ、はあっ……れろっ、ちゅっ……ん、おいし……」

【華乃】

「裏筋も……れろっ、れろお……れろ、れろっ……はあっ、はっ、れろっ……れろっ……気持ちいい……？」

【華乃】

「お尻も舐めちゃいたいけど……私にスイッチ入っちゃうとお風呂場で土下座することになりそうだし、また今度にするね」

【華乃】

「今は綺麗にするのが目的だからね……いっぱいぬるぬる……じゃなかった、石鹸付けて……」

【華乃】

「先っぽを手のひらでこするのもヤバいんだっけ？
こんな風に……にゆるん、にゆるんって」

【華乃】

「ほら、にゆるにゆる、ぐちゅぐちゅ……先っぽ、つるつるになっててかわいい……」

【華乃】

「はあっ、はあっ……ぴくぴくしてる……イキそう？ イケそう？」

【華乃】

「ちよっと待ってね、体密着させる……出すなら私の胸か顔に出してね」

【華乃】

「出すときは先っぽもみくちやがいい？ 下から上に搾るかんじのがいい？ ああもう、すっごく気持ちよくしてあげたい……」

【華乃】

「出そう？ もう出る？ 泡だらけになって出したら気持ちよさそう……イクときはイクって言うってね……」

【華乃】

「あっ、たまたまきゅってなった！ 出る？ 出るの？ 出そう？」

【華乃】

「私の体のどこでもいいからいっぱい出して！ 我慢しないでいいからね！ ま、我慢なんてできないくらい搾りだすけど……」

【華乃】

「イキそう？ イク？ イツちゃう？ いいよ、出して……ほら、足開いて……そのほうがエロいから……」

【華乃】

「男の子の気持ちいい瞬間、私に見せて……イツて、出して！ エッチなの見せて！」

【華乃】

「あっ、出たあ！ わっ、出てる出てる、いっぱい出てる……今日、いっぱいしたのに、まだこれだけ出るんだ……」

【華乃】

「いいよ、いっぱい出して……全部出したら、シャワーで流して、中まで吸ってあげる……最後まで出して……」

【華乃】

「もう石鹸なのか、あんたが出したもののなのか、わかんない……すっごくエロい……」

【華乃】「全部出した？ しゅん……ってなってる……そんなにいっぱい出した？ 気持ちよかった？」

【華乃】「じゃあ泡は流して……エッチなものいっしょに流れちゃうのが残念だけど……」

【華乃】「あむっ……んっ、ちゅっ、ちゅううっ……ちゅっ、ぐくっ……んちゅ、ちゅっ、ちゅううう……」

【華乃】「ん、ぐくっ……えへへ、ちょっと味薄いかなあ……朝も昼もたーっくさん出したもんね……でも、おいし……ぐっくん」

【華乃】「あー……やっぱり私、手でするのが好きかも……ずっと見てられるし、好きなだけいじれるし、自分のものっていう実感ある……」

【華乃】「本音を言えば落書きしちやいたい。『私の専用』って……お風呂入るなら、すぐに洗って落とせるし……今度、だめ？」

【華乃】「はあ、興奮した……萌えた……あ、でも、このまま湯船浸かったら、お湯の中に出したものの混ざっちゃうね……」

【華乃】「一度、シャワーで流すね……先に湯船浸かって」

【華乃】「あの……あの、さ」

【華乃】

「いやちょっと……や、ほんとネタだと思って聞いてもらいたいんだけど、仲がいいからこそ言える冗談みたいな……いやその、全部が全部ネタってわけでもないんだけど……」

【華乃】

「そこで私のひとりH見ててって言ったら……引く？」

【華乃】

「違うの！ だだ、だって、今日は何度もエッチしてて、今もいっぱい出したから、さすがに出せるものも出せないのになって……！」

【華乃】

「ででっ、でも、好きな人の気持ちいい瞬間見たら、私もそんな気分になってきちゃって、ちょっと欲しいっていうか、されたいっていうか……」

【華乃】

「でも出したばかりで疲れてるだろうし、それなら自分で、って……や、ごめん。忘れて」

【華乃】

「え」

【華乃】

「あ、あの、ちょっと……なにこれ？ 壁……ではないけど、壁ドン？」

【華乃】

「あ、あれえ……もしかして今、私迫られてたりする？ 今日はいもう無理かなって思ってたんだけど……あんたの体力的に」

【華乃】

「いや、まあ……したいよ。一人でしたいって言うたくらいだし。挿れてほしい。今は、うん……ラブラブよりもめいっぱいいいじめられたい」

【華乃】

「やつ！ え、なに、後ろ向き……？ バ、バック……？」

【華乃】

「い、いや、いいよ。今の気分にはぴったり……ただ、うん……問答無用で挿れてくれてたら100点満点……」

【華乃】

「んうッ！ あっ、それっ……！ は、挿入って、きたあ……！」

【華乃】

「あッ、んっ！ やっ、お風呂場でバックとか……大好きなシチュ……！ 興奮する……！」

【華乃】

「えっ？ 前に私が同人誌のあとがきで、お風呂場のバックが好きって言ったの覚えてて……？ あんた、やるう……さすが私のカレシ……んッ！」

【華乃】

「あっ、やつ、そんな事実を聞かされたら、余計に萌え……じゃなかった、燃える……！ あっ、後ろからガン突きして……！ 激しく……してッ！」

【華乃】

「あッ、やつ、んっ！ あっ、ああっ、ヤバイヤバ いめっちゃきもちいい……あっ、んッ！ やあっ、あっ、声出るっ、出ちゃうっ……！」

【華乃】「ひうッ、あっ、ああっ！ そ、それは……お、お風呂場だから、我慢しないでいいんだけどお……んッ！」

【華乃】「でっ、でもっ、自分の声が響いて……余計興奮するのっ！」

【華乃】「あっ、んッ、やうッ……！ ああッ、やんっ！ はッ、ふあッ、あっ、いいッ！ あっ、きもちいいッ……あっ、イッちゃう、あッ、やあっ！」

【華乃】「やうッ、ひんっ！ あ、ああッ、んッ、あうっ……興奮するっ……このシチュ……普段優しいカレシからケモノのように犯されるシチュ、興奮するっ……！」

【華乃】「あっ、やんっ！ やっ、こんなときまでオタク丸出しでごめんっ……！ 謝るから激しくしないで……やっぱりうそ、激しくされるの好き……！」

【華乃】「はあっ、はあっ、きもちいいッ……やうッ、これやばいッ……！ 定期的にされたい……！」

【華乃】「忘れたところに不意打ちでされたい……妄想捗る……心のオタクに火が点いて、最高オブ最高……！」

【華乃】

「控えめに言っておまりにも無理……！ しんどい
オブザイヤー、圧倒的感謝……！ 今日のエッチ
が神対応すぎて……やあんっ！」

【華乃】

「ああッ、きもちいいっ……！ だめこれ、イッ
ちゃう……！ もっとずっとエッチしてたいの
に、我慢できずにイッちゃう……！」

【華乃】

「あっ、ああっあっ、やっ、もうだめえっ……イ
ク、イッちゃう、やあっ、あッ、イクっ、だめえ
ええっ！」

【華乃】

「はあッ、イクっ、あっ、やっ！ 激しくしてッ、
あッ、やあんっ！ ひぐッ、うっ、んんッ！ あ
ッ、もうだめっ！ あっ、やあっ！ あッ、イク
うっ！」

【華乃】

「出してッ、ああっ、なかっ！ やんっ！ もうイ
クからっ！ いっしょ……やうッ！ いっしょに
イキたいっ……やあっ、もうだめ！ やあっ！
イクっ！」

【華乃】

「やあああああああッ！ やっ、うあっ、ひあ
んっ……！」

【華乃】

「あッ、イッてる……！ やあっ、すっ「い、ひ
あっ、あッ、波きてるっ……！ やあっ、とまら
なッ……やんっ！ ああっ、やんっ！ ひ
んっ！」

【華乃】

「ああっ、きもちいい……あっ、んッ！ やんっ……はあっ、はッ、はあっ……も、だめ……体支えるの、無理い……」

【華乃】

「えっ？ あっ、キス……んっ」

【華乃】

「んむっ、ちゅっ、ちゅうっ、んむっ……ちゅっ、れろっ、はあッ、ちゅむっ、んちゅっ、れろっ、ちゅううううっ……」

【華乃】

「はあッ、はあっ……激しいエッチのあとのキス、7億万点優勝……あんた、私のこと理解しすぎ……え、これも同人誌のあとがきで言ってた？」

【華乃】

「えへへへ、もう何から何まで、私の趣味嗜好把握されてて……控えめに言って優勝……やっぱ付きあうなら、自分のガチ勢に限るってワケ」

【華乃】

「最高に気持ちよくて、最高に幸せだったよ。あとでベッド入ったら、ずっとくっついてようね。今日はもうこのあと1mmも離れたくない……」

【華乃】

「……ただちょっと心配なのは、あんた、体力……というより、精力的に大丈夫？ や、精力って、気力活力的な意味じゃなくて、もっと直接的な意味での」

【華乃】

「私のカレシだからがんばる？ えっへへ、やるじゃん……」

【華乃】

「今夜？ このあと？ ああ……さすがの私も今日はラブラブだけで過ごしたいかな……ま、ご期待とあればするけど？」

【華乃】

「へへ、今のその表情最高……大好物。カレシの困った顔しか勝たん」

09. 終幕・So damn precious……

【華乃】「——こうして話すと、色んな思い出あるね。付きあう前にも、付きあったあとにも」

【華乃】「あんた、自覚あるのかないのかわかんないけど、私と付きあう前から『かわいい』って結構言ってるからね。それ全部刺さってるから、覚えておいてね」

【華乃】「なんかさー……付きあう前だったり、付きあった直後だったり、今こうして一緒に暮らしてたり……あんたとの関係は何度か変化してるけど……いつでも楽しかった思い出しかないんだよね」

【華乃】「それは関係が変わっても同じ会話してるー……っていうんじゃないくて、そのときどきの関係に沿った会話が楽しいっていうか……」

【華乃】「多分ね、あんたとは根っこから話が合ってるんだろうなって。性格が合ってるって言えばいいのか？ 自分の奥底に根付いてる部分が同じっていうか……」

【華乃】「居心地がいいの、ほんと。女の子でも、こんなに波長が合う子いなかったのに……アメリカはちょっと近いけど、あの子はそもそもオタクじゃないし」

【華乃】「まさか男の子でね。こんな面倒で、気難しくて、口うるさい私の居場所を、隣に用意してくれる人に会えるなんて……」

【華乃】「って、やめやめ。なんでエロゲやってる最中に、こんなしんみりした話してんの？ 始めたの私だけど」

【華乃】「そういうところも好き？ はいはい。ま、でも私だって……あんたのそう言ってくれるところが好き」

【華乃】「今でも毎日かわいって言うてくれてるの、いつもときめいてるからね」

【華乃】「ま、でも、忙しい日に1日くらい言い忘れたって怒らないから……これからも続ける？ じゃあ好きにしないさい。私もこれから一生、あんたにときめいてあげる」

【華乃】「……ところでさ。さっきからなんで手が止まってるの。エロゲの途中でしょ」

【華乃】「は？ なに主人公の台詞読むのやめてんの。さっきまではちゃんと声に出してたでしょ。読みなさい」

【華乃】「なんでよ！ ここからが本番なんだけど！ ちゃんと喘いでる台詞読みなさいわよ！」

【華乃】「は？ それ楽しみにここまで付きあったんだけど、ど、は？ なに妥協してんの？ エロ台詞読まない？ はああああ？ あんた私のカレシでしょ！？」

【華乃】

「ちょっと意味わかんないんだけど、ちゃんと『ここ舐めろ』とか『たまんねえな』とか声に出して読みなさいよ。ここ読まずしてエロゲのなにを樂しめというの？」

【華乃】

「頭きた、台詞読まないなら素で喘がせる。今日の私は本気だから、あんた覚悟しなさいよ」

【華乃】

「あとさっき言い忘れたけど……あんたとぴったり合ってるのは性格や波長だけじゃなくて、体の相性もだからね」

【華乃】

「これからもいっぱいエッチして……お互いの」と、もっと好きになろうね」

【華乃】

「ほな、いただきます」

10. ポテンチループ

【華乃】

「ぱりっ……」

【華乃】

「(動画を見ているだけの通常の吐息)」

【華乃】

「くっ……」

1 1 . にゃんにゃんループ

【華乃】

「にゃー……ん」

【華乃】

「にゃんっ、にゃんっ……」

【華乃】

「にゃううん……」

【華乃】

「にゃーん……にゃんっ……」

1 2. 二度寝用目覚まし

【華乃】「起こしに来たけど」

【華乃】「ねえちょっと。あんた、起こしてとか言っ
てなかった？ 予定あるんじゃないの？ ねえ」

【華乃】「あのねー、あんた……私、あんたのお母さん
じゃないんだけど。いつまで寝てんの。ねえ。あ
んた」

【華乃】「はあ……まあこういうの……嫌いじゃ
ないんだけど。あんたに余裕があればいいけど
ね？」

【華乃】「ねーえっ！ 起きなくていいの？ ねえ？
くすぐるけど？ って、それはやりすぎか……」

【華乃】「ほら、起きて。じゃれたくなっちゃ
うでしょ。ねーえっ！ 起きないの？ ねえ？
知らないけど？」

【華乃】「もう」

【華乃】「ちゅっ」

【華乃】「精一杯甘やかしたからね！ これで、
おき、起きなさいよ！」

【華乃】「はあ……恥ずかしくなってきた。ま
た10分したら来るからね！ 今度こそ起きな
さいよ？ ほんと、知らないからね！」

【演出】「約10分間の無音パートを収録しております。ループ再生などでご自由にお楽しみください。」